

われわれは，高橋是清から何を学ぶのか

松元崇

高橋是清というとすぐに思い浮かぶのは高橋財政，井上準之助が断行した1930（昭和5）年1月の金解禁がもたらした不況から回復させた積極的な財政政策として有名です。しかしながら，今日はもう少しスパンの長い歴史の話をします。それは，そのように見ていくことによってわれわれの抱いている高橋のイメージが実像とは随分と違うことに気付かされるからです。そして，それによって高橋からわれわれが何を学ぶべきかがより明らかになるからです。

われわれが，高橋から学ぶべきことは，理論を重視するが，理論を単純に現実に当てはめるのではなく，まずは現実をよく見極め，その上で頭を柔軟にして臨機応変にことに対処しなくてはならないということです。また，人事を尽くして天命を待つこと。その上で，うまくいかなくても世の流れを楽しむ楽天主義です。そして，人々を幸せにしたいとの信念です。

高橋は，大蔵大臣の前に，20年以上日銀マンであり，農商務省の役人であり，英語の教育者でした。教え子は超一流で，日本銀行本店の設計などを手がけた辰野金吾などでした。高橋は，教育者といっても，実務を重視していたところに，その特色がありました。今日の横浜市立大学の

前身である横浜商業学校の卒業式で，高橋は学問の重要性を述べた上で，「修めた学問を実際に応用することに努力してこそ，初めて教育の効果が表れるのであります。諸君は，学問に吞まれず，学問に使われず，学問の奴隷とならず，あくまでも学問は自分が使うべきものであるという固き信念を抱いて職務に邁進せられたいのであります」と訓示しています。また，別の機会には「いくら外国の経済学に精通しても，日本の経済界の実情を知らなかったら，その知識を活用することはできない。実世間から離れた学問では何にもならない」，「学問を利用せずして，却ってその奴隷となる人が少なくない」と述べています。